

## 序

一遍の伝記絵には周知のように『一遍聖絵』（以下『聖絵』）と『遊行上人縁起絵』（以下『縁起絵』）の2種の絵巻作品がある。『縁起絵』の序論では仏教東漸から、仏の教えに聖道門と浄土門の二門があり、さらに浄土門のすぐれていることを説いたうえで、「爰近来一遍上人と申せし聖の念佛勧進の趣、承こそ有かたく覚侍れ」と述べる。これは中世に盛行したいわゆる「高僧絵伝」の典型的な語り方で、『縁起絵』は時宗祖師の伝記を語る姿勢が明瞭である。対して『聖絵』は、「一遍ひじりは俗姓は越智氏、河野四郎通信が孫く出家して如仏と号すゝが子なり」と一遍の出自を述べることから伝記記述を始めている。すなわち一遍の世俗的実像の位置づけからその伝記を語り始めようとしているのである。

『聖絵』はしばしば鎌倉時代「高僧絵伝」のひとつとして解説されることが多いが、その内容は上述の序文に表われているように、いわゆる「高僧絵伝」とはやや異なった伝記叙述の方向性をもっている。それは『聖絵』の主人公一遍と伝記絵の企画者聖戒とともに伊予河野家を出自とし、しかもおそらくは聖戒が一遍と同族であること、さらに一遍の宗教活動の場面で聖戒自身が一遍に付き添い、同じ時間と場を共有していたことと大きく関わっているだろう。しかし聖戒が一遍のよき理解者であり、一遍の宗教活動の目撃者であったことは間違いないにしても、それが12巻全48段の絹本伝記絵巻の伝記を執筆し、この作品を世にもたらした原動力であったことへの十分な説明にはならないだろう。数ある「高僧絵伝」が存在する中で、聖戒があえてこのような企画を実現させようとしたことは極めて興味深い。

『聖絵』が一遍の宗教活動を物語る伝記絵巻であることは間違いないが、他の高僧絵伝とは異なる魅力を有していることもまた事実である。それを解説するには一遍の活動がなぜ『聖絵』においてそのように「語られ」、「描かれ」たのか、ここに注目して検討する必要がある。今、この課題に対して直ちに正解を用意することはできないが、いくつかの話題を取り上げて考えてみたいと思う。

本稿はこのような関心のもとにまず一遍、聖戒が河野家の一員であったこと、これが『聖絵』の構造を支える軸のひとつをなしていると考え、河野一族の一遍、聖戒の問題を取り上げてみたい。

## 一遍が後にした二つの館 — 河野一族の一遍、聖戒を考える

まず一遍と聖戒の関係を確認しておきたい。『聖絵』によれば、一遍は宝治2年（1248）10歳で母を亡くし、父の命で出家、13歳で父の勧めによって太宰府の聖達上人のもとで修行すべく故郷を後にしている。長期間の勉学の後、弘長3年（1263）、父の逝去により伊予に帰国。しばらくは伊予で「俗塵にまじわりて」過ごすが、ある時「生死のことわりを思ひ知り仏法のむねを得」て、師の聖達を再訪することになる。その時聖戒は出家して一遍に同行することになった（ここで『聖絵』に始めて聖戒の名が登場）。

その後一遍は善光寺参詣、伊予窪寺で念佛修行、伊予菅生の岩屋寺参籠を果たし、文永11年（1274）伊予を離れて遊行の旅に向かうことになる（『聖絵』02-2）。この間聖戒はずっと一遍に付き従っていたようである。注目すべきは聖戒にとっての師は一遍であると言えるが、もう一方の師は聖達であったと考えられる。聖達は浄土宗西山派の祖、証空の弟子として著名であり、聖戒の勉学の基礎に浄土宗西山派の教学があると思われ、「聖戒」という法名が「聖達」に依ると考えてよいだろう〔今井 1981〕。因みに聖達は『法水分流記』聖達条に「予州住」とあり〔1〕、一時予州に居住したことが分かる。この時河野家との親交があったのかもしれない。

ところで『聖絵』には一遍と聖戒の世俗的な関係については一切語られてない。いくつかの意見が提示されているが、まず聖戒の歌が『玉葉和歌集』（伏見上皇による勅撰和歌集。正和2年（1312）成立）に収められていることを記す『勅撰作者部類』（建武4（1337）成立）聖戒の条に「聖戒 樋口聖 一遍房弟也」と明記されていることに注目しておきたい〔藤原 2004〕〔2〕。これによれば聖戒は一遍没後京都にあって「一遍弟」として知られていたことが分かる。確かに聖戒を一遍の兄弟として記す系図資料もないではない。

現存する河野家の系図を検討した山内氏によれば、その家譜や系図類における通広・一遍の記述のされ方には以下の3つのタイプがあるという〔山内 2011〕。

- 1) 系譜の中に一遍が記述されないタイプ
- 2) 系譜の中に通信の子のひとりとして別府七郎左衛門（通広）があげられ、その子として智真房（一遍）のみが記述されるタイプ
- 3) 系譜の中に通信の子のひとりとして別府七郎左衛門があげられ、その子として智真房のほかに聖戒・仙阿など数人の名が記述されるタイプ

山内氏は、こうした系図タイプの変遷に「当初一族の系譜の中に必ずしも明確に位置づけられていたわけではなかった通広や一遍が、時宗の社会的影響が大きくなるにつれて河野氏の系譜の中に位置付けられ、さらにそれが次第に詳細になってゆく過程」を明らかにし

た。

さて、聖戒が「一遍聖の実弟であるとも、異母弟であるとも、義弟であるとも、甥であるとも、さらには実子ともいわれてきている」と「諸説並立状態」の中で、聖戒の顔の描写と相当年齢に着目して聖戒と一遍の具体的な関係の手がかりを探ったのは黒田日出男氏である [黒田 1991、1994]。その際、黒田氏の求めた手がかりは、

- 1) 聖戒の剃髪した時期（一遍に従って太宰府へ旅立った時期）
- 2) 聖戒の顔や姿からの年齢の見当

である。検討の結果、聖戒が剃髪し、一遍に従って太宰府に旅立った年齢は13～15歳。その時期は文永5～7年（1268～1270）頃。また聖戒の顔から伊予桜井における別離の場面で描かれる聖戒は20歳過ぎくらいになっていると判断される、とした。この推定から聖戒の生年を建長7年（1255）頃とした。

ここから導かれる一遍と聖戒の関係は

- 1) 一遍の母の没年は宝治元年（1247）であるから、聖戒は一遍の同母弟ではありえない。
- 2) また一遍は聖戒誕生時には17～19歳、しかもその頃彼は太宰府の聖達上人のもとにあり修行中であった。したがって聖戒は一遍の実子でもりえない。

結果として「従来の諸説で生き残るのは、一遍聖の異母弟説・義弟説と甥説」のみと結論づける。

これを『聖絵』の絵から再確認しつつ、一遍を中心とする河野家の家族構成について考えてみたい。検討の対象は『聖絵』01-1（一遍、太宰府に出発する場面の一派生家 図1）と02-2（桜井まで同行せんとして出発する聖戒 図2）の2場面であり、ここには出立する一遍が後にした館と、そこから見送る人々が描かれている。

図1



この家を一遍の生家とすることには異論はないだろう。場所は河野氏拠点である河野郷別府であろう [米倉 2019]。ここには一遍を見送る人々が描かれているが、当場面の人物比定については様々な意見がある。一遍の父（広通 如仏）を庭上に立つ僧侶や縁に座る武士とする意見、あるいは縁の武士の脇の女性を広通の後妻とする意見があり、庭に座る少年を聖戒とするなどなどである。

この図の背景となる状況を確認しておきたい。

- 1) 一遍と聖戒の年齢差は黒田氏の指摘に従いたい。すなわちここに聖戒の姿はない。したがってこの図に示される聖戒の記憶があるとするならば一遍生家の場所周辺の景のみであり、見送る人物たちの構成は聖戒の、あるいは画家の構想による。
- 2) 詞によれば一遍が太宰府に仏道修行のために送り出されたのは13歳である。なぜそうになったのか。一遍は通広の家においては長男ではなく、父広通はおそらく家督を嫡子に継がせる心つもりで、その成人を間近に控えて一遍を仏道修行に向かわせることとなったのだろうと推定する。先にも述べたように河野通広の系統を示す資料には限りがあるものの、一遍が世に知られるようになってから、通広の家系にも光が当てられたとする指摘がある。そのようにして蘇った通広の系譜に通広（別府七郎左衛門）を継いだ嫡子がいたようで [3]、その弟たちに聖戒や一遍、仙阿が記されていることを重視したい。
- 3) 一遍の太宰府に向けて出発する段階で、一遍の生母はすでにいない。

なお兵藤裕己氏の縁上の武士を一遍の父、通広と推定する意見 [兵藤 1993] に対し、当場面に対応する御影堂本に縁に座っている武士の姿は描かれていらないとして、削除・付加されやすい画像ということになり、重要な意味をなさない人物であり、その点からも父通広とは考えがたいとする指摘がある [黒田 1994]。しかし 02-2（一遍一行が伊予を出発するに際して聖戒もしばし同行する場面）に対応する御影堂本では 家の縁から見送る老夫婦（？）のうち男のほうが写されていない。同じことが繰り返されているのである。また 02-3 に対応する一遍の四天王寺において念仏札を配る場面で、『聖絵』では一遍の脇には超一、超二らしき人物しか描かれていないが、御影堂本には複数の僧侶が控える光景が描かれる。御影堂本は『聖絵』稿本の模写とされているが、そこにオリジナルの『聖絵』をどのように読み込むことができるだろうか。しばらくは御影堂本の読解とともに慎重に検討したい。

以上がこの図を読み取る際の想定しうる事実から見た状況である。つまりここには一遍の生母はいない、また通広の嫡子が描かれているはずである。しかし多様な解釈を生んでいる人物比定の議論の推移を見ると、想定しうる状況を超えた描写上のレトリックが存在

するのかもしれない。小さな一遍を連れて伊予を離れゆく一行、それを見送る人々が対比的に描かれる。気になるのは心配そうに見送る人々とはやや違った風情の人々がいることである。縁の上の武士と太刀を脇に置く少年を中心とした4人の人々である。彼らの視線は一遍一行には向けられていない。縁の武士は河野通広、太刀持ちの童子として表されるのは通広の嫡子と見たい。通広と嫡子、この二人を中心に今後の通広の家が継続してゆくことになるが、それを示す象徴的な関係が描かれている、と私は解釈する。嫡男ではない一遍の太宰府行は、分家を可能にする家督がない場合の通例であろう。去りゆく一遍と通広・嫡子の描かれ方に聖戒の気持ちが反映していると見てもよいかもしれない。

ところで聖戒の没年を記す唯一の文献は『開山弥阿上人行状』である。それには元亨3年（1323）2月15日、63歳で入滅したと記されており、これによると聖戒の生年は弘長元年（1261）となる。これに沿って聖戒の年齢を考える議論が少なからずある。この『行状』は周知のように問題を抱えた資料であり、ここに記述されている諸事績の年記によることは危険である。この没年が何によるのか不明であるが、これを使用した場合、文永11年（1274）伊予を出発する一遍一行に桜井まで同行し、また故郷に戻った聖戒はわずか13歳ということになり、不自然であると同時に、当段の絵を参照するならば聖戒はとても13歳の童子とみることはできない。先に紹介した黒田日出男氏の推定に従っておく。

聖戒が通広の系図に記されていることや、聖戒と聖阿弥陀仏が発願し、一遍とその父如仏の追善供養のために造立した南無仏太子像（宝菩提院蔵）の存在を考えるならば、如仏はまた聖戒の父であった可能性が高いといえる。つまり一遍、聖戒は異母兄弟であったと考えたい。

## 図2



聖戒の家族を検討する材料は『聖絵』02-2、絵の前半、一遍一行が伊予を出立し聖戒がこれに同行する場面である。当段の人物、特に一遍一行の人物描写には問題がありそうで、

その人物比定には意見が分かれており、ここでは一行を見送る人々に限定してみてみよう。庭で一行を見送る女性は聖戒の母、後ろの少年を聖戒の弟、仙阿。縁で見送るのは聖戒の実母の両親とする越智通敏氏の意見 [越智 1988] に従っておく。

この場面は文永 11 年（1274）2 月のことである。通広が示寂して 10 年以上が経ち、おそらくその嫡子が家督を継いだ後、聖戒の実母は実家に戻ったのであろう。聖戒実母の実家と考えたい。

この場面は一遍の宗教活動のスタートのひとつを飾る記念すべきエピソードであるが、一方聖戒にとっても強く記憶されるべきものであったと思われる。おそらくは一遍が伊予を離れることにより、聖戒が一遍からの自立を余儀なくされたのである。一遍が後にした家、おそらくこれは聖戒の育った家であり、絵を見る限り一遍の伊予出立はこの家からの可能性が高い。見送る人々の悲しみに包まれた風情が気になるところであるが、聖戒は数日後には帰宅するはずであるから、聖戒の家族にとっても一遍との別れは悲しいものであったことを表しているように見える。その意味するところを含めて、一遍と聖戒の絆を確かめるためにもこの絵はもっと深く読まれる必要がある。

絵を含めた状況証拠を検討し一遍・聖戒は異母兄弟の可能性が高いと考えておくが、なにより重要なのは両者が河野家の一員であったことであり、そしてこの絆による両者の関係が『聖絵』という物語の軸の一つをなしていることではないかと思われる所以である。

## 一遍の鎌倉入り

そこで『聖絵』の構造の一つの軸をなす河野家の文脈で読み解かれるべきエピソードをひとつ挙げておきたい。一遍の鎌倉入りの一件である。弘安 5 年（1282）3 月 1 日、一遍は同行を率いてこぶくろ坂より鎌倉に入ろうとするが、武家一団によって制止される（『聖絵』05-5）。

なぜ制止されたのか、これについてはあまり議論された形跡はない。もっぱら描かれている場所はどこか、描かれている武士は誰か、に焦点があてられてきたように見受けられる。制止の理由は、おそらく鎌倉における黒衣念佛僧に対する規制であったろうか。弘長元年（1261）の「関東新制条々」は文暦 2 年（1235）7 月の「念佛者事」（「称念佛者着黒衣之輩、近年満都鄙、横行諸所、□動現不当濫行云々」の状態であったことへの規制）を制度化したもので、念佛者事については「道心堅固之輩者」は鎌倉にいれてもよいが、濫行するなどのものは鎌倉から追放せよ、また「僧徒裏頭横行鎌倉中事」として禁制せしむ

べきことが示されている [佐々木 2006]。黒衣の念仏者、しかも男女入り混じった数十人の一行の鎌倉入りが許されるわけはなかつたであろう。

この直前、一遍は「鎌倉いりの作法にて化益の有無をさだむべし。利益たゆべきならば是を最後と思べき。」となみなみならぬ意志を一行に伝えている。鎌倉入りを制止された挙げ句、彼は「念仏勧進をわがいのちとす。しかるをかくのごとくいましめられれば、いづれのところへかゆくべき。こゝにて臨終すべし」と激しい言葉をはいている。よほどの事情を読み取るべきであろう。この一件について、武家政権の中心都市鎌倉における勧進という一遍の強い意欲を読み取ること、これが無難な読み取り方なのであろうか。この激しい言葉の背後に、制止されて引き下がることは「一遍のカリスマ性を著しく貶め」ることになり「真教以後の時衆教団にとっても大きな疵となって残るとの認識が働いた」 [砂川 1999]、あるいはこうした激しい言葉のパフォーマンスによって宗教者としての力量を示した [松岡 1999]、長い旅の間に緩んできた同行集団に対して、それを引き締める意味があったとする読み方 [砂川 2012] がある。同行者たちにとって奥州までの長旅の目的が、単に一遍の祖父の追善供養だとするならば彼らの気の緩みも分からぬでもない。間違った指摘とは言えないのだろうが、すっきりとはしない。

ここで一遍一行が鎌倉に至るまでの足跡を簡単に振り返っておきたい。弘安3年（1280）一行は信州善光寺から白河関を経て、奥州江刺の一遍祖父河野通信の墓を訪れて追善供養を果たしている。以後松島、常陸国、武藏国石浜から鎌倉に向かったのである（05-3～4）。そして鎌倉である。ここで想起したいのは山内譲氏が早く「鎌倉將軍に直接臣従を許され、所領を安堵された数少ない西国御家人の一人に、伊予国の河野通信がいる。」 [山内 1998] として注目し、また後に石野弥栄が『吾妻鏡』の記事に河野通信の動向を追い、通信の鎌倉における姿を明らかにしている [石野 2015] ことなどである。

注目されるのは、以下の記事である。

- ・文治5年（1189）7月、通信は源頼朝に従い奥州に出陣して軍功を重ねた。ここで重要なのは通信が鎌倉より出陣した軍勢一千騎中の重だった御家人として登場している。[4]。また、
- ・正治元年（1195）10月、頼朝逝去後、梶原景時糾弾事件が発生。同月28日、千葉介常胤をはじめとする関東御家の多数が鶴岡八幡宮の廻廊に集まって景時糾弾の謀議をめぐらすが、通信はそれに加わっている [5]。

石野氏はこれらの記事に西国御家の名は通信以外に登場しないことを強調、「頼朝の時以来通信は、西国御家人でありながら幕府内の有力な東国御家人に比肩するほどの立場に

あったと考えられる。」とし、さらに「河野氏のように幕府の諸行事に参勤して、幕府の吏僚的な存在である西国御家人は、他にみられない。」とする指摘を行っている。

しかし建仁3年（1203）4月、通信は頼家から帰国を許され、しばらく居住した鎌倉を去って帰国の途についた [6]。『吾妻鏡』はここで「通信年来有鎌倉之處。適賜身之暇明日可帰國之間。」と記しており、通信が年来鎌倉にあったことが分かるのである。

周知のようにその後承久の乱において通信は院方に、通信の子通久は幕府方に属し、一族は分裂した。幕府方の勝利に終わったその結果、通信は奥州配流、河野氏の庶子であった通久の子孫が河野氏嫡流となり、また通信の子通広流の別府氏などが存続を許されたのである。承久の乱までの間、通信の動勢は不明であるが、石野氏は承久の乱直前まで通信が鎌倉に居住していた可能性が高いと推測している [石野 2015] [7]。

しかし、通信が建仁3年（1203）鎌倉を去って以降、承久の乱勃発までの彼の動勢が不明であり、また鎌倉を去る際、「身之暇」をいただいたとする記事にはかなり重い決断があったように読みとれるのではないかと思われる。承久の乱以前に通信が鎌倉に帰還したと考えるのはいかがかと思う。

本稿で確認しておきたかったことは、一遍の祖父である河野通信が、鎌倉幕府において東国御家人にならぶ重要な御家人として鎌倉に居住していたことであり、この事実が河野家にもたらしていたであろう記憶の重さである。一遍の鎌倉入りの強い意志は単に鎌倉における勧進のみならず、祖父通信の墓参の直後、彼が居住し活動した場所でその追善供養を行いたいという気持ちが強かったのではないかと考える。かくして、一遍の鎌倉入りの一件における、彼の激しい言葉の、そしてこの言葉を記した聖戒の語り口の、納得ゆく理解に一步近づけるのではないか。通信墓での供養といい、鎌倉入りの一件といい、これらは『縁起絵』でふれることがない。これらのエピソードが同行者とは関わりのない、つまり時宗教団とは直接関わりのない一遍自身、あるいは河野家の問題であったことを物語っているのではないだろうか。

以上、これまでの検討によって「一遍ひじりは、俗姓は越智氏、河野四郎通信が孫、同七郎通広＜出家して如仏と号す＞が子なり」と、聖戒が『聖絵』テキストを述べ始めた意味が理解できたよう思う。冒頭に伝記叙述の大軸が示されていたのである。そして一遍出立を描く2つの絵画（図1, 2）、ここにはテキストには語られていない通広系河野家のありさまが、聖戒の心的風景の記憶として展開されている。その記憶は、『聖絵』制作

と共に明確に再構築され、テキスト化されて、聖戒のもうひとつの言葉として画面に表されたのである。

『聖絵』はおそらく、輻湊するいくつかの軸によって構成されていると思われるが、それらを解き明かすことでもまた『聖絵』研究のひとつの課題であろう。

## 註

- [ 1 ] 『法水分流記』(野村恒道・福田行慈編『法然教団系譜選』青史出版 2004)
- [ 2 ] 『勅撰作者部類』(宮内庁書陵部蔵)
- [ 3 ] 長福寺本『河野系図』、続群書類従本『越智系図』には通朝(七郎左衛門)を記す。
- [ 4 ] 『吾妻鏡』文治五年七月十九日条(石野氏の引用記事は「吉川本」による)
- [ 5 ] 『吾妻鏡』正治元年(1195)十月二十八日条 梶原景時糾弾事件
- [ 6 ] 『吾妻鏡』建仁三年(1203)四月六日条
- [ 7 ] 『吾妻鏡』承久元年九月二十二日条。石野氏が注目するのは当条が記す鎌倉大火の記事で、ここには「火起河野四郎浜宅之北辺」とあって、この頃まで河野通信は鎌倉の浜の近く、材木座のあたりに居住したと推測している。ただしこの記事の「河野四郎」については、『吾妻鏡』諸本では「阿野四郎」としている。石野氏はこれを「阿野氏」とすると、頼朝の弟阿野全成の子孫ということになるが、阿野一族は駿河国で反乱を起こし、族滅しているので(『吾妻鏡』承久元年二月二十二日条)、同年の数ヶ月後阿野氏が鎌倉に邸宅を構えているのは奇妙であるとして「阿野」は「河野」の誤写であるとする[石野 2015 第一章註 11]。

## 文献

- 石野弥栄: 2015 『中世河野氏権力の形成と展開』 戎光祥出版社
- 今井雅晴: 1981 『時宗成立史の研究』 吉川弘文館
- 越智通敏: 1988 「「一遍聖絵」をめぐって—その問題点の中から」(『時宗教学年報』 16)
- 黒田日出男: 1987 「絵画史料とその読み方—『一遍聖絵』を主たる対象として—」 (『史海』 34)
- 黒田日出男: 1991 「一遍の顔／聖戒の顔」(『現代思想』 19-7)
- 黒田日出男: 1994 「表象としての空也と一遍」(『思想』 839)
- 佐々木文昭: 2006 「「関東新制」小考—弘長元年二月三十日関東新制を中心として—」(義江彰夫編『古代中世の政治と権力』 吉川弘文館)

砂川博：1999 『中世遊行聖の図像学』 岩田書院

砂川博：2012 『徹底検証一遍聖絵』 岩田書院

兵藤裕己：1993 「物語としての一遍聖絵—生いたちの物語化をめぐって」（一遍研究会編  
『「一遍聖絵」と中世の光景』 ありな書房）

藤原正義：2004 「聖戒について—“桜井の別れ以後”」（『時宗文化』 9）

松岡心平：1999 「踊り念仏の興行師」（武田佐知子編 『一遍聖絵を読み解く』 吉川弘文館）

山内譲：1998 『中世瀬戸内海地域史の研究』 法政大学出版局

山内譲：2011 「一遍の一族 — 鎌倉時代の伊予河野氏—」（『日本歴史』 763）

米倉迪夫：2019 「一遍聖絵の一断面—聖戒の記憶とその絵画化について」（『国宝一遍聖絵の全貌』 高志書院）